

令和3年度第1回奈良県教育サミット開催議事概要

開催日時：令和4年1月28日（金）13：30～15：00

開催場所：奈良県コンベンションセンター コンベンションホールC

【概要】

（司会）

- ・ 開会のお知らせ
- ・ 報道関係者へ、議事進行の妨げとならないカメラビデオによる撮影の配慮を依頼。
- ・ 感染対策について、会場入口での検温・消毒や、マスクの着用、人と人との間隔を概ね2メートル確保すること、間隔を2メートル確保できない席へのパーティションの設置、会場の扉を開放した換気を周知。
- ・ 荒井知事より挨拶の案内。

（知事）

- ・ この教育サミットは、県と市町村長の行政サミット会議に教育長に入っていた形で開催している。
- ・ 現場の校長先生はまだ来られたことがないが、今後そのようなこともあるかもしれない。
- ・ そのようなことの意味として、日本は、教育を国家教育で行ってきたが、教育振興大綱を地方で策定できるようになり、地方行政の教育関与の分野が広がってきたというのが大きなことである。
- ・ 教育委員会の壁が小さくなり、見える化ができてきたというような印象がある。
- ・ それをどのように使うかというのが我々のテーマになる。
- ・ このような会議では、情報の交換や情報の共有化、意見交換による意識の共通化ということに大きな意味がある。
- ・ 教育とは、今の日本で最大の課題と言っても過言ではない。これまでの国家教育から地域が関与した教育に大きく変わる可能性がある。
- ・ そのような意識を持って、この奈良県教育サミットが進捗すればありがたい。

（司会）

- ・ 奈良県教育サミットは、知事と市町村長及び県教育長と各市町村教育長が集まり、教育行政に関する各種情報の交換、共有を行う場として毎年開催している。
- ・ 新型コロナウイルス感染症対策の観点から、例年のアイランド形式による意見交換を行う形から、スクール形式での席配置へ変更した。
- ・ 配布物の確認
- ・ （次第、出席者名簿、座席表、資料1・2・3、3月21日にオープンする「なら歴史芸術文化村のパフレット」の7点）

[資料1「教育DXの推進によるSTEAM教育について」の説明]

(吉田教育長)

- ・ポストコロナ期の新たな学びの方向性として、ICT教育のさらなる推進、STEAM教育の実践を通じて、現代社会で求められる資質能力を子どもたちに育成することについて説明。
- ・最初に、令和3年度の全国学力学習状況調査における、本県の状況について簡単に説明。
- ・まず、ICTの活用の現状については、従来、奈良県は、教員のICT活用指導力が全国に比して非常に低いということが、大きな課題となっていた。この調査結果を見ると、学校で作成した学習動画等を活用した学習が全国平均の約2倍。
- ・同時双方向型のオンライン指導についても、全国平均の3倍となっている。
- ・また教職員と生徒がやりとりする場面や、生徒が1人で活用する場面についても、全国平均を上回っており、ICTの活用がかなり現場で進んでいるという状況。
- ・それに反し、生徒質問紙において、「自分によいところがある」「難しいことにもチャレンジする」というような自己肯定感に関わる質問項目や「学級の生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」というような質問項目では全国平均に比べると低いという現状。
- ・ICTの活用、それから子どもたちの自己肯定感や学習に取り組む姿勢の課題を克服するために、今後さらなるICT教育の推進、STEAM教育の実践といったもので対応していきたい。
- ・ICT教育をさらに推進するための具体について、まず一つ目は統合型校務支援システムを各学校に導入しており、市町村の皆さんの協力により順調に導入されているところ。
- ・様々な教育データをデジタル化しクラウドベースで共用できるように推進したい。市町村立学校と県立学校の間で、クラウド化したデータを、共有できるように現在調整をしているところ。
- ・令和5年度入試からはこのシステムを活用し、中学校と高校でデジタルデータのやりとりをするようにしていきたい。
- ・二つ目は、県内の公立学校の児童生徒及び教員に、Googleアカウントを付与しており、このGoogleアカウントを活用することで、遠隔での授業、また教員のオンライン研修がスムーズにできている。
- ・特に県立学校では、対面と家庭での学習を同時双方向で進行する授業、いわゆるハイフレックス型の授業にも取り組んでいるところ。
- ・三つ目は、コンピュータを活用したテスト、いわゆるCBT(Computer Based Testing)に今後取り組んでいく。それが実践できるように、教科等研究会等とも連携を図りたい。
- ・これがICT教育のさらなる具体的な推進策である。

- ・ 今後は、カリキュラムを柔軟に編成し、教科等横断的に課題解決学習に取り組む STEAM 教育に県教育委員会として取り組んでいく。
- ・ STEAM 教育とは、S はサイエンス、T はテクノロジー、E はエンジニアリング、工学、A はアートで芸術と人文科学、M はマセマティックスで数学である。
- ・ こういった教科等横断的な教育課程を編成しながら課題解決学習に取り組んでいくという教育が STEAM 教育である。
- ・ 例えば、プログラミング教育を小・中・高等学校と実践していく中で、こういった STEAM 教育に取り組んでいくことや、義務教育段階で教科等横断的な教育課程を編成し、そして課題学習を中心に、STEAM 教育に取り組んでいくという実践例が考えられる。
- ・ さらに、カリキュラム・マネジメントの充実として、例えば小・中学校の総合的な学習の時間を、STEAM 教育を実践する核とし、教科を超えた教育課程を編成し、自ら考えて探究する「学ぶ力」を養っていく。
- ・ そのためには、柔軟な教育課程の編成が必要。
- ・ また、STEAM 教育を行う上では、今までのような、教員が一方通行で行うものから、子どもと先生が対話をしながら授業が進んでいく、対話をしながら課題を見つけていく、対話をしながら課題を解決していく、そのような対話型授業への転換が求められているところ。
- ・ 来年度、県立学校では、電子黒板を活用しながら、対話型授業への転換を図るように、現在、予算の要求をしているところ。
- ・ この STEAM 教育では、例えば SDGs と関連した学びを、STEAM 教育を通じて実践していくということも考えられる。
- ・ SDGs の 17 の開発目標には、エネルギーや働きがい、経済成長、まちづくり、気候変動、海・陸の話などがある。
- ・ これらは日本の小・中学生にとっても当然学ぶ必要があることであり、SDGs と関連した学びを総合的な学習の時間で実践していくことも考えられる。
- ・ その際には、大学、企業、地域と連携した高度な学習へ発展していくことも必要。
- ・ この STEAM 教育については、大和平野中央スーパーシティ構想の中で実践していきたい。
- ・ もちろん、市町村で、小・中学校、あるいは小・中・高等学校と連携しながら、この STEAM 教育を実践していきたいというご要望等があれば、県の教育委員会に申し出ていただきたい。
- ・ 大和平野中央スーパーシティ構想の中での実践、小・中・高等学校等で連携しながらの実践、この二つの取組で STEAM 教育を実践していきたい。
- ・ 本人のための教育は、「生きる力」「学ぶ力」を育てていく教育でもあるので、ICT を活用した教育、STEAM 教育で、こうした本人のための教育の実践に努めたい。

[資料2「対話型授業の事例発表」の説明]

(県立青翔中学校・高等学校 藪田校長)

- ・ 対話型事業の事例発表として、ICTを活用した授業実践について発表。
- ・ 青翔中学校・高等学校は、御所市にある。
- ・ 学校の沿革について、平成16年に全国初の理数科単科高校として開校した。
- ・ 平成26年に併設中学校が開校し、1クラス40名が入学。
- ・ 平成29年から2クラスずつ中学生が入学。
- ・ 現在、中学校が6クラス、高校が5クラスの11クラスで活動。
- ・ 今年の4月より全学年2クラス、合計12クラスの学校となる。
- ・ 本校は全国初の理数科単科高等学校であり、奈良県立としては初めての併設型の中高一貫教育校である。
- ・ 本校を開校するにあたってのコンセプト・ミッション・使命は、奈良県の中部南部地域の理系進学拠点校ということ。
- ・ また本校は、文部科学省からSSH（スーパーサイエンスハイスクール）校の指定を受けており、今年で11年目を迎える。
- ・ 本校の進学実績については、昨年3月、1クラス31名が卒業し、京都大学、大阪大学、北海道大学、神戸大学や愛媛大学の医学部に進学。
- ・ また、私立大学の同志社大学、関西大学、関西学院大学や近畿大学といった大学に進学。
- ・ 本校で、今年度より力を入れていることは、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善、それと、1人1台パソコンを見据えた授業改善。
- ・ この後、ICTを活用した授業例として、まず高校1年生の理科生物の授業の動画を流す。
- ・ この授業は、グーグルジャムボード及びグーグルフォームを使った授業。
- ・ グーグルジャムボードとは、オンライン上で使えるホワイトボードのこと。
- ・ 双方向対話型の授業を展開することができる。
- ・ 本校は、教員用のパソコン、電子黒板をすべての普通教室に入れている。
- ・ 教員用パソコンや電子黒板で教員が書いた内容が、生徒のパソコンにも保存され、生徒は、教員が板書している内容をノートに書き写す必要がなく、教員の説明に集中することができる。
- ・ また、欠席した生徒は自宅で、教員が板書した内容を、リアルタイムで知ることができる。
- ・ グーグルフォームは、オンライン上のフォーム作成ツールのこと。
- ・ アンケートを作ることにより、小テストをしたり、授業の振り返りを行ったりすることができる。
- ・ 生徒の小テストの結果を、教員は瞬時に集計することが可能。
- ・ では、この後、一年生、生物の授業を見ていただく。約5分間の動画。

【生物の授業でのグーグルジャムボードとグーグルフォームを活用した動画】

- ・今回は、高校生物基礎の植生の多様性と分布という単元の気温から求めた暖かさ指数というものをを用いて、バイオームを推測する授業。
- ・この授業で大きなポイントとなってくるのが、対話的な学習とICTを合わせ、生徒の学びに対する姿勢、考え方を向上させようとしたこと。
- ・そのために、今回は-googleJamボードと-googleフォームを活用。
- ・Jamボードを活用すれば、模造紙などに付箋を貼ったり書いたりしていたものをオンライン上で行うことができる。
- ・操作も直感的で、文字を打ち込むと-googleJamボードに反映される。
- ・-googleJamボードを-googleクラスルームで生徒に共有すると、生徒も編集することが可能となる。
- ・オンライン上に残せることで、生徒にとっては授業を振り返ること、教員にとっては、保存と評価が非常にしやすくなっているのが、このシステムの利点。
- ・授業中の問いをフォームで行うことで、評価や生徒の変容を見取ることが容易にできる。
- ・生徒が実際に使用していた-googleJamボードには、自身の意見を書き出している段階では、必要な情報が乱雑と書き込まれているが、対話的活動が始まると似ている意見にどんどん分けられていく。
- ・最終的には必要な情報が整理されているのが、こちらのJamボードを見れば分かる。
- ・生徒の授業前後での記述の変容を見てみると、事前の記述では、「何々と思う」という不確かな内容で回答していたが、事後では、具体的なデータ、そして根拠などを挙げて論述を説明できるようになっている。
- ・本時の後に自身の振り返りをさせたところ、多くの肯定的な意見が見られた。
- ・続いては、ICTを活用した中学校1年生の数学の授業。約6分間の動画。

【-googleフォームを使った授業、Jamボードを使った授業の2回分の授業】

- ・ICTを活用した本校での授業の一部分である。
- ・ICTを活用することで、生徒と教員との対話、生徒同士の対話をよりスムーズにすることができると確信している。
- ・まだまだ学校としては模索中だが、ICTを利用することにより、今まで以上に対話的な授業ができればと考えている。

[資料3「スーパーシティ構想における教育振興について」の説明]

(吉田文化・教育・くらし創造部長)

- ・大和平中央スーパーシティ構想における教育振興について、本日は、特に県立大学工学系第2学部の設置、就学前教育、リカレント教育の3点について説明。
- ・資料3は、昨年11月に開催した大和平中央スーパーシティ構想、コンソーシアムキックオフ会議において、県が用いた資料。
- ・4ページ、大和平野中央プロジェクトの対象地域を記載。

- ・ 5 ページ、大和平野中央プロジェクトの背景と経緯を記載。
- ・ 磯城郡の川西・三宅・田原本町の磯城郡3町において、県立大学工学系第2学部を核とした、スタートアップビレッジと、まほろば健康パークやスポーツ施設を核としたウェルネスタウンをテーマとしたまちづくりを目指すプロジェクトである。
- ・ 6 ページ、大和平野中央スーパーシティ構想に盛り込むテーマは記載のとおり。
- ・ 各テーマのうち、1の県立大学工学系2学部、3の就学前教育、4のリカレント教育について説明。
- ・ 7 ページ、県立大学工学系第2学部の内容。
- ・ 県立大学工学系第2学部は、県内における若年層の人口流出が進む中、今後、デジタル人材のニーズが高まることを踏まえて、三宅町において、県立大学に工学系の第2学部を設置しようとするもの。
- ・ 8 ページ、情報工学系の学部として、科学的論理的思考に習熟し、高度なデジタルスキルにより、現場の課題を解決できる地域リーダーを育てることを目指す。
- ・ 9 ページ、教育の特徴としていくつかポイントを挙げている。
- ・ ポイントの1から3にあるとおり、未来志向の教育環境として、少人数対話型教育における科学的、論理的な思考力を育成できるようなカリキュラムを目指すほか、オンライン授業なども積極的に活用するなどとして、多様な教員体制や、柔軟な単位取得制度を検討していきたい。
- ・ ポイントの4が、幼稚園から大学までの連携として、来年度、この4月に開校する県立大学附属高等学校等と連携し、早期履修制度を導入するほか、地域の小中学校とも交流して、STEAM教育を展開したい。
- ・ ポイントの5、6では、学びと職との円滑な接続として、中長期のインターンシップを実施し、学生の円滑な就業や起業を促進していくほか、社会人の学び直しの推進として、キャリアアップチェンジ等のリカレント教育も実施したい。
- ・ 10 ページ、県立大学工学系第2学部では、大学を核として、研究機関や企業・創業支援機関、就業支援機関、人材開発機関を集積させ、スタートアップ支援拠点を形成することを目指している。
- ・ 11 ページ、さらに、知的交流拠点として、大学関係者や訪問者が集い、交流サロンなどで、知的交流ができる拠点となるようにしたい。
- ・ 12 ページ、スーパーシティ構想における二つ目として、就学前教育の充実に取り組むこととしている。
- ・ まず、3町における就学前教育の充実のうちの一つ、3町における一体的な就学前児童のはぐくみとして、(1)「はぐくみ園」による幼保一元化では、大和平野中央版の「就学前はぐくみ要綱」を策定するなどし、磯城郡3町の就学前教育施設を「はぐくみ園」として、幼保一体化する取り組みや、待機児童を発生させない広域保育などを検討したい。
- ・ また、(2)の通り、0歳児からの就学前教育の実践として、「奈良県版就学前教育プログラム・はばたくなら」の実践や、自然保育の推進を進めたい。

- ・ 13 ページ、インクルーシブ保育や地域に開かれた子育て支援の拠点づくり、質の高いきめ細かな保育、就学前教育を推進するための体制を充実したい。
- ・ 14 ページ、放課後児童対策について、すべての小学生のはぐくみを推進するため、親の就労の有無にかかわらず、放課後児童クラブの利用を希望する児童の受け入れを行うことや、放課後はぐくみプログラムとして、住民やNPO等が参画した多様なプログラムを実践し、まち全体を、放課後のはぐくみの場となるようにしたい。
- ・ 15 ページ、さらにインクルーシブ学童保育として、特別な支援を要する子どもたちのため、放課後等デイサービスや障害児支援サービスを連携した、学童保育の実践も目指したい。
- ・ 16 ページ、就学前教育の充実のうち、最後の一つはこども食堂である。
- ・ 各小学校区に常設のこども食堂を開設することや、地域の誰もが参加できる「地域丸ごとこども食堂」、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーなどが参画した「はぐくみのこども食堂」などを目指したい。
- ・ 17 ページ、地域のリカレント教育について、(1)、まず、県立大学におけるリカレント教育では、県立大学工学系第2学部の設置を契機として、県内の若者、女性、中高年性、外国人などを対象としたリカレント教育に取り組みたい。
- ・ 県立大学における産業界のニーズに応じたりカレントプログラムの開発など、実践的なリカレント教育プログラムを開発実施していくほか、高等技術専門校や知的交流拠点を活用し、リカレント教育を進めたい。
- ・ 18 ページ、このほか、大学の知的交流拠点において、リカレント教育参加者と大学スタートアップ関係者が相互に交流し、企業セミナーや交流イベント、インターンシップの推進などに取り組んでいきたい。
- ・ 磯城郡3町の地域性と独自性を生かしながら、就学前教育とリカレント教育に関する教育振興大綱の策定につなげたいと考えている。
- ・ 就学前教育やリカレント教育などについては、各市町村においても日々様々な課題に向き合い、取り組みを進めていると思う。
- ・ 今後もこのエリアにおける取り組みに留まらず、県内全体で課題を共有し、取り組みを進めていきたい。

[質疑応答及び意見交換]

(奈良市長)

- ・ STEAM 教育について、この春に一条高校附属中学校を開校するため、理化学研究所の松本先生はじめ、三名の外部アドバイザーが就任。
- ・ 特にカリキュラムをいかに多様化していくか、我々だけの力では、十分にカリキュラム開発が難しいところもあり、外部の方にも入っていただき作っていきたい。
- ・ 高校受験がないという中高一貫の強みを生かして、自分が興味のあることをしっかりと探究していく、そういう教育を作っていきたい。

- ・我々が今回そういうチャレンジができたのは、まさにこのICTを使った、スーパースマートスクールというものを2016年に民間人校長を招聘して取り組んできたことが下敷きになっている。
- ・そこにさらに大学入試改革により、入試の幅がかなり広がったことにより、従来の知識詰め込み型の受験勉強でなくとも道が開ける、場合によっては、日本の大学ではなく、海外も視野に入れて進路を開いていこうと、そういったライフスタイルというか、キャリアモデルが見えてきたということが、この一つの形になっている。
- ・大学入試の時に、従来型の知識を問うような勉強に立ち戻らなければならず、せっかく柔軟で感性を生かした教育をしても意味がなくなってしまうということがあった。
- ・その中で、この大学入試改革の次は何かというと高校入試の改革だと思う。
- ・高校入試の場合は残念ながら大学入試改革ほど、自由度のある状況にはなっていないと承知している。
- ・例えば県立高校などにおいて、入試のポイントをどこに置くのか、つまり、いわゆる知識を問うような詰め込んだ知識の答え合わせをするような、こういった受験の仕組みではなく、まさに子どもたちが中学校3年間で培ってきた柔軟な発想と、そして我々が「自立学習」と呼んでいる、自ら学ぶという部分をしっかりと評価できるような入試改革をしていくことが、次に求められていくと思っている。
- ・我々はICTの力も借りながら、自立学習と個別最適学習を教育改革の柱にしている。
- ・高校入試改革というところは、奈良市では触れられないところが非常に大きいので、ぜひこの辺りを、吉田教育長はじめ、県の方でもいろいろとまた議論をいただけると大変ありがたい。

(川西町教育長)

- ・昨年度この場で、川西町のICTの教育を進めている様子をご紹介いただいた。
- ・一昨年より、奈良県教育委員会や県立教育研究所、奈良教育大学、高専からいろいろな支援をいただき、職員研修を進めながら、このGIGAスクール構想を進めてきた。
- ・そして、先日、小学校に出向き、6年生の教室で行われている1人1台のタブレットを机の上に置いての学習を見学してきた。
- ・6年生の国語の時間で、討論会をしようという前段階の思考をしている段階であった。
- ・黒板には、学習活動として「バタフライチャートに、自分の考えをまとめよう」と書いてあり、子どもたちは一生懸命、タブレットに向かい、タブレットの中にあるバタフライチャートに自分の意見を一生懸命書き込んでいた。
- ・おそらく、これから先に討論会をするときに、自分の考えを、タブレットに書き込み、そして思考しているところであった。
- ・まさにシーンとした中で、一人一人が自己内対話をしているというふう感じた。
- ・ある子どもに、「ロイロノートにはもう慣れたか?」と聞くと、「はい」と答えてくれる。
- ・それぞれの学年で、このようにロイロノートをうまく使って学習している。

- ・ 答えのはっきりしない時代、正解のない時代と言われるが、町では、学力観を「何を学んだか」ということから、「これから何ができるのか」という力を高めていきたい。
- ・ 自分の考えをまとめる、そして、考えたことを、図や、文に表す、書くということを大事にし、そして思考の具現化を図っていきたい。
- ・ あと一つ、思考する時に、シンキングツールをうまく活用しているということがある。
- ・ 自分の考えを、ロイロノートのシンキングツールで、図に表したり、他者と自分の意見を比較するとき、多面的に考えようとするときには、先ほどのようなバタフライチャートを使ったりし、或いは自分の考えを構造化していこうとするときには、ピラミッドチャートなどもうまく活用しているというように、ICTを活用しながら、自分の思考を高めている。
- ・ また、考えを練るといふようなことが、GIGA スクールで今進んでいるところ。
- ・ 「奈良県ロイロノート」で検索すると、川西小学校の舞台をイメージした校舎が出てくるので、ぜひ一度検索していただけたらありがたい。

(吉田教育長)

- ・ 奈良市から「入試について県教委としてどのように考えていくのか」とご質問をいただいている。
- ・ 教育振興大綱にある、「学ぶ力」というものを、小・中学校を通じてどのように育むのか。「学ぶ力」というのは一体何か。
- ・ ただ単なる点数ではなく、学ぶ意欲であるとか、そういった思考する力、伝える力、いろいろな力があると思う。
- ・ 「学ぶ力」を育むために、来年度は、教育振興大綱を実現する、学ぶ力を育む、あるいは高校の特色づくりを推進する、また、子どもたちの健康、安全、その教育を推進するための、組織改編を考えている。
- ・ そのような中で今後の入試をどのように変えるのかということは、大変大きな課題。
- ・ ただ単に、調査書の点数と、当日の試験で取った点数を足して子どもたちを評価するという評価の在り方を、すべて変えられなくても、やはり見直す必要があるのではないかという思いから、現在、高校入試に関する検討委員会を立ち上げている。子どもたちの何を評価するのかということから考え直さなければならないと思っている。
- ・ 小・中・高等学校と連携しながら、いろいろな教育活動を実践した子どもたちが、高校入試を単なる、点数だけで足して、はい、受かりましたとするよりも、やはり小・中学校連携の中で、実践したものを正しく評価しながら、それを高等学校で引き継いで、さらに子どもたちを伸ばしていくという入試も必要ではないか、地域と連携した、小・中学校と連携した高等学校の入試も必要ではないかとも考えながら、奈良市長がおっしゃったことを実現できるようにして参りたい。

(王寺町教育長)

- ・ 王寺町では、令和4年4月に、施設一体型の王寺北義務教育学校、並びに南側にある比較的新しい学校施設であるところの、旧の学校を使って施設分離型の王寺南義務教

育学校の2校を開校させる。

- ・ これに当たり、奈良県に支援をいただいたおかげで、工事の方も順調に進み、現在、いろいろな最終の工事完成を目指している。
- ・ 新しい学校が完成した後、その中で何をやっていくのかについては、まだまだ整備並びにご指導を賜りたい。
- ・ 子どもたちが、自ら学んで、先生からの教えに対して受動的に知識を得るのではなく、自分たちが頭の中でそれをどう発想し、自分たちの中から導き出していくのか。それを通して、子どもたち同士が対話を通して深く学んでいくという、基本的な部分について、何ができるのかということが本当に難しい。
- ・ 今、子どもたちが1人1台端末を通じて、奈良県が指導して、GIGAスクール構想を進めていただいている。
- ・ 今、先ほどの事例紹介でもあった、グーグルジャムボード等々、いろいろなツールを使わせていただき、子どもたちが、積極的に参加してくれている。
- ・ 単に子どもたちに自由にパスをさせて対話をさせるだけでなく、深い学びにつなげるために、町では、若い先生方が中心となって、何ができるのかを整理し、いろいろと研究をしているところ。
- ・ その中の事例で、まず1点、読解力をいかに向上させていくか。子どもたちが、自分の考えをどう表現するのか。そしてまた、友達の言葉から、それをどういうふうに読み解いていくのか、教科書を含めて、いろいろな面でこの読解力が本当に大切になっていくのではないかとということで、読解力にまず視点を当てている。
- ・ その読解力の中で、まず大事なことは、その中のエビデンスをしっかりと取ることであると考えている。
- ・ 本年度、子どもたちのリーディングスキルを調べたが、子どもたちのそれぞれ一人一人の個性というのはあるものの、学校によって、その強み弱みというのが数字に示されてきた。
- ・ 例えば、ある学校では、言葉から図形にする力が、ものすごく強いけれども、その言葉の中から、いかにそのことを推論し、推論から今得られた知識から、新しいものをどう論理的に展開していくかという力が弱いということが見えた。
- ・ 基本的な文章を正しく組み立てる力が弱いなど、それぞれの学校によって、どこが強く、どこが弱いのかということの整理をまず行った。
- ・ そういう情報をしっかりと尽くして掘みながら、子どもたちに対しやっていけるのかということが大事。
- ・ それともう1点、今、個別最適化学習をしっかりと進めていきたい。
- ・ この個別最適化については、子どもたち一人一人が、どういう現状にあるのかということとをしっかりとデータとして残していくことと、それによって、子どもたちに合った予習復習の教材を提供すること、これにより子どもたちに適した発言、また今後の進歩につなげていけたらということで、先生方が利用している。
- ・ これは、今、1人1台の端末を持って、子どもたちがそのノートの中で、テストに挑戦すると、機械が採点し、個々に応じた予習復習プリントを自動配布してくれる。教

員からも指導に注力できるということで高い評価を得ている。

- ・ ただこれも今、まだまだ試行的な段階なので、今後、本当に県の方のいろいろなご指導と、また今日お越しの皆様、また各市町村のいろいろな情報も見て、試行錯誤をしながら、今後ともしっかりと事業を進めていきたい。

(田原本町長)

- ・ 就学前教育については現在、大和平野中央スーパーシティ構想の中で議論をしている。就学前教育は保育だけではなく幼児教育、保護者の就労支援、そして障害者のサポートと多岐にわたるニーズがある。
- ・ それをサポートすることにより、その地域の魅力がかなり上がってくる。
- ・ いろいろな課題があるが、それを提案し、課題解決に向けた一つのモデルケースにしていきたい。
- ・ 現在、田原本町も予算編成をしている中で、一つ気になっているところが、18歳未満の障害児の給付費の事業費が、平成26年度と比べると約3倍に上がってきているということ。
- ・ これは、おそらく他の市町村も同じだと思う。
- ・ 国2分の1、県4分の1、市町村4分の1であるが、それが右肩上がりの状況ということは、就学前18歳以下の障害児教育のところに、福祉の視点が入ってきているのではないかと感じている。
- ・ 教育現場、特に小学校・中学校という義務教育現場にこういったニーズの受け皿を作っていないといけない時代が来たのではないかと考えている。
- ・ そのあたりもぜひ、必要な構造の中で課題があれば提案し、教育と福祉の課題の解決を実現していきたい。

(吉田教育長)

- ・ 特別支援教育については、山辺高等学校に軽度知的障害の自立支援農業科を設置する。
- ・ 高等学校の教育課程では、特別支援学級をつくることは認められていないため、高等学校の教育で、軽度知的障害の子どもたちが卒業できるような取組を考えている。
- ・ 特別支援教育においては、個別の指導計画に基づいて行っていることが、系統的ではなかったのではないかという思いをもっている。山辺高等学校の自立支援農業科を設置するにあたり、各教科を系統的に学べるような教育課程を考える必要もあると考えている。今後、県の方でも研究して参りたい。

[知事総括]

- ・ 最初の教育委員会のプレゼンにあったICT教育について、ICT教育の意味というものを考えていると、ICTはどちらかという手段だと思う。
- ・ ICTを活用して、何をするのかということになる。

- ・ ICTを活用して教育で何か良いことができるのかと思っていたところ、今日の話だと、やり方によって違うのだと感じた。
- ・ 一つは、今まで教育の質というのは、教員の質に左右されていたように思うが、ICTを活用すると、教室の壁を取り除いて、いろいろな先生の教育内容をICTで紹介できるようになる。
- ・ それができるかどうか、これからどうするかどうかはこれからになる。
- ・ もう一つは、ICTを使った対話として、対話型教育というのは、とても大事だと思うが、対話型教育をICTでできるのかどうか疑問に思っていた。
- ・ しかし、本日の事例発表のようにICTを活用して、いろいろできるということが分かり、むしろ心強く思った。
- ・ もう一つはICTを使った理解の仕方として、教育委員会の資料の中にあるように、STEAM教育の項目を見ると、ほとんど理科系のような、数字を中心とした教育の内容が並んでいる。
- ・ これは、教育の方向が数字を使おう、客観性を持とうということであると思う。
- ・ 理解のツールとして、先生の言うことを覚えなさいということから、残ったことから考えなさいというように変化するきっかけになれば良い。
- ・ 本質的な理解は、多様な理解があり得るが、いろいろな角度での理解が進むと、イノベーションとかソリューションに繋がるというのが最近の理論。
- ・ できるだけ客観性にに基づきながら、自己の理解を、対話で磨き上げるということになれば、良い教育になる。
- ・ 大和平野中央でつくろうと考えている工学系第2学部は、ソリューション中心の工学系学部になるが、そこで、強調しているのは対話型教育。
- ・ 現場の対話型教育というのが、学部開学までにいろいろ進むことになれば良いと思う。
- ・ 奈良県では、教育の効果が地域に残るようにしたい。これは雇用戦略と教育が結びつかなければならないということ。
- ・ この2月議会では、多様な人材の育成と就労の支援、再教育の支援というような名称をつけた条例を出す。
- ・ 地域主導型雇用を県と市町村とパーク事業者の方々と協力して行うという条例。その中で実学教育というのは大きな意味を持っている。
- ・ 地域に就職する人の人材育成のための教育というのが、奈良県の中では大きな意味が出てきている。
- ・ 奈良県の新しい学部のテーマの一つに、ソリューションできるスタートアップを掲げている。
- ・ いろんな事業所の展開が奈良で行われるということはあるがたいことで、そのためにも、役に立つ人材の育成というのは大事。
- ・ このように、役に立つ人材、本人のためになる教育ということを目指していると、「学ぶ力」「役に立つ力」は付くが、「進学する力」を阻害するのではないかという意見が出てきそうに思うが、奈良県の教育は、お子さんに生涯学ぶ力を付けていただくのがねらいであることを、うまく説明できれば良いと思う。

- ・ 子どもの実力を評価するのに、学力評価だけではなく、ソリューション力を評価するように、会社も社会も変わっていければ良い。
- ・ 最後に、本人の向上心を育むということには大きな意味があるが、向上心を作るには、教員の向上心が必要。
- ・ 我々行政の中でも、職員の向上心を引き出すには、首長の向上心が必要。
- ・ また、民間の向上心を育むには、行政の向上心が必要。
- ・ 教育サミットで、このような議論を行うことで、それが伝播して、民間の向上心、或いは関係者の向上心に伝播するのは間違いないということを実感した。

[閉 会]